

学会印象記

そして橋は架かったのか？ —7th ICAAPが映し出したもの—

長谷川 博史

Hiroshi HASEGAWA

日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス代表, PWA 小委員会委員

1. HIV 陽性者のための会議

2001年12月29日、友人が営む小さなレストランで、後に第七回アジア太平洋エイズ国際会議(7th ICAAP)で事務局次長を務めることになる樽井正義さんと文化プログラム委員長の宮田一雄さんから、当時空席となっていたアジア太平洋地域の HIV 陽性者のネットワークである APN+ (Asia and Pacific Network of People Living With HIV/AIDS) の国内窓口を引き受けて欲しい、とのお話をいただいた。同時に、2003年に神戸で開催される予定の7th ICAAPでPWA小委員会委員長をつとめて欲しいとも。

私は94年に横浜で開催された第10回国際エイズ会議にプレスとして参加した程度の会議経験しかなかった。しかし、そこで数多くの HIV 陽性者や活動家と出会い、その人たちとの繋がりが私の現在の活動の原点となった。それから10年後、治療は大幅に進歩したものの、HIV 陽性者を取り巻く社会の状況に大きな変化は無かった。話を聞けば聞くほど、責任の重大さを実感した。しかし10年前の自分のように、現在も根強く残る HIV/エイズのスティグマ(汚名・差別的烙印)に苛まれている多くの陽性者たちが元気になるきっかけになれば、と考えた。

また、なかなか進まない予防と病院で目の当たりにする患者の急増に焦りを覚えていた矢先のことでもあった。これを機に国内のエイズ問題への関心を高めることが出来るかも知れない、と淡い期待を抱いた。そして、組織委員として関わるならこの会議を HIV 陽性者のための会議にしようと考え、その依頼を引き受けることにした。そして、この会議をきっかけに、国内における HIV 陽性者の可視性を高めたいとも考えた。

“Bridging Science and Community”をテーマとする7th ICAAPを HIV 陽性者のための会議にという方向性は間違っていなかったと、会議が終わった現在も思っている。ただ、それが実現出来たかどうかは別として。

2. 橋を架ける者たち

私はそれまで個人で活動することが多かった。そしてゲイ雑誌の編集長という職業柄、ゲイコミュニティにおける予防活動に重点を置いてきた。しかし、PWA委員として会議に関わるのならば、感染経路やセクシュアリティに関わりない HIV 陽性者としての幅広いネットワークが必要だと感じた。そこで、2002年4月、日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラスを立ち上げることとなった。今になって思えばなんと無謀なことを考えたものか。

同じ頃、日本のキーコンタクトとして APN+ の定例総会に参加した。そこではそれまでメーリングリスト上では知らなかった各国の代表が集まり、直接会い、いろいろな話をすることができた。前年に南アフリカのケープタウンで開催された治療アクセス準備会議に初めて参加した韓国、モンゴル、パキスタン、パプアニューギニアなど、アジア太平洋地域の国々の HIV 陽性者を迎え、APN+ はネットワークを広げようとしている時だった。

東南アジア諸国や南アジアのいくつかの HIV 陽性者団体は組織的にも大きく、その活動内容も国際機関と協働したり、自国の政府とも協働し、政策にも強い影響を与えるほどに成熟していた。

多くの国際機関が日本をドナー国として位置づけていることから、私も“途上国を支援する日本”のイメージを勝手に抱き、HIV/エイズの分野でも“先進国日本”は途上国に対し支援する側であると無条件に考えていた。そんなわけでアジアの HIV 陽性者団体の実情を知る前、私たちは途上国の HIV 陽性者に何が出来るかを探るつもりで定例総会に出かけて行った。しかし、そんな傲慢な考えはいっぺんに覆され、HIV 陽性者ネットワークの構築について、アドボカシーの手法について、国際機関との協働について、まず私たちがアジアから多くのことを学ぶ必要があることを痛感した。

彼らはさまざまな障害を乗り越え、自ら動くことで目の前に横たわるギャップを埋めるために、草の根のコミュニティレベルから国際レベルまで、精力的に活動していた。

社会、経済、文化、政治、宗教など、ありとあらゆる領域に存在するギャップを解消するために身を呈して活動する彼らのような HIV 陽性者こそが、コミュニティと科学に象徴されるエイズ問題のさまざまなギャップに橋を架けるのだとその時痛感した。

同時に高水準の治療が保証されている日本にも解決すべき問題が数多く残されていることを再認識することができた。

3. 遠い道のり

こうして始まった 7th ICAAP への道は予想外に困難なものだった。

まず、やっと始まろうとしている治療アクセスをアジア・太平洋地域の途上国においていかに進めるかが重要なポイントとなってくる。折しも 2002 年 9 月には WHO が「2005 年までに 300 万人のエイズ患者に対し新たに抗 HIV 治療を提供する」という 3 by 5 イニシアティブが発表され、7th ICAAP はその実現に向けて折り返し点にあたる極めて重要な会議になった。その矢先、SARS がアジアを襲った。この新しい感染症はまるで台風のようにアジア各国を襲い、日本もいつその暴風圏内に巻き込まれてもおかしくない状況に直面することとなった。

この時の日本社会の反応は 1980 年代後半のエイズパニックを彷彿させた。島国日本では厄災はいつも海の外からやってくるものと考えられているらしい。高速移動が可能となり、一日に何万人もの人が海峡や国境を越えて航空機で行き来する時代であるにも関わらず。当然、アジアからの多くの参加者を迎える 7th ICAAP の 2003 年開催について感染症の専門家とコミュニティに基盤を置く活動家双方を含む組織委員の意見は分かれた。やっと動き出した途上国での治療アクセスを左右する会議の重要性故に実施を主張する委員と国内状況を鑑み中止あるいは延期を主張する委員によってメーリングリスト上で激論が交わされた。しかし、誰もが開催の必要性と開催することで起こりうるリスクを十分理解していた。いま当時を振り返ってみるとそれぞれの主張は立場の違いによるものだったと思う。

その結果、7th ICAAP は 2005 年に延期されることが決定したが、アジアの HIV 陽性者たちの落胆は大きかった。また、延期を決定した組織委員会も 2005 年まで準備をさらに重ねなければならない上、延期の代償として会議を必ずや実りあるものにする責任を負った。私にとっても、アジア・太平洋地域の HIV 陽性者たち、世界の HIV 陽性者たちが直面し闘っている問題をより深く理解し、会議がその解決に貢献できるようにしなければならない。それは重い課題ではあった。

延期にともない 2004 年 1 月にはバンコク市において 7th

ICAAP の代替会議が開催され約 1,000 名もの参加者がアジア・太平洋各国から参加した。さらに同年 7 月にバンコクで“Access to All”のテーマで開催された第 15 回国際エイズ会議は過去最大の規模となり、日本での会議延期をよそにアジア太平洋地域の国々は治療アクセスの拡大に向けて前進を続けていた。その中でクローズアップされたのが政治的リーダーシップの重要性であった。

4. 波乱の幕開け

7th ICAAP のテーマは“Bridging Science and Community”であり日本語では“科学とコミュニティの英知の統合”と表された。しかし、UNAIDS 事務局長 Peter Piot 氏を初めとして国際機関の代表者や各国の保健大臣など閣僚クラスの参加があったにもかかわらず、日本政府は尾辻厚生労働大臣の出席を直前になってキャンセル。はからずも日本政府の HIV/エイズ問題へのリーダーシップの欠如を国際社会に露呈する結果となった。

さらに、約 2,900 名の参加を見た 7th ICAAP ではあったが、そのうち国内からの正式登録者数は 900 名弱、毎年 12 月に開催される日本エイズ学会の通常の参加者を大幅に下回った。この参加者の少なさから、日本国内で科学とコミュニティのギャップを埋めること、さまざまなセクター間に存在するギャップに橋を架けて HIV/エイズに対する国家的な取り組みを強化する、という課題は果たすことが出来ないだろうことが予測された。

そのような国内事情にも関わらず組織委員会の運営努力は海外の参加者から高く評価された。例えば各トラックが個別に進められていくのではなく、さまざまなセクターからの参加者が課題を共有するよう配慮されたプログラム。日本の HIV コミュニティのホスピタリティ。

いっぽうで、世界でも最高水準の治療アクセス環境にある日本が、社会的には差別偏見の解消が遅れ、国民の関心は低く、その結果予防にも失敗している、といった日本のエイズ事情に対する新たな認識も世界に広がった。

5. アジアからの衝撃

個人的に HIV 陽性者の会議として位置づけた 7th ICAAP ではあったが、ふたを開けてみると苦しい財政状態の中、スカラシップ委員会やプログラム委員会の理解を得て、結果的には国内外から二百名を超える HIV 陽性者が集まることが出来た。さらに前日に UNDP (国連開発計画)、APN+, INP+ (Indian Network of People Living With HIV/AIDS) の共催による第三回アジア太平洋 HIV 陽性者会議も開催された。

初日午前中に開催された HIV 陽性者限定の Positive Forum はおよそ 150 名の参加者を数え、そこには日本からの



アジア・太平洋地域から参加したコミュニティの活動家たち
(撮影 菊地 修)

参加者も数多く含まれていた。また、ここ以外にも PWA ラウンジ、展示ブースなどで国内外の HIV 陽性者の交流が活発に行われた。初めて国際会議に参加した HIV 陽性者は、諸外国の HIV 陽性者の精力的な活動、国際的な広がりを持った戦略、完成度と実効性の高いプログラム、成熟した組織など、実状を目の当たりにして大いに触発されたようだ。寄せられた意見には「当事者としての自覚を持ち、当事者の立場から日本の HIV/エイズ問題に貢献したい」「日本における HIV 陽性者のためのアドボカシー活動に興味を持った」「日本のエイズ対策の後進性に気付いた」などの感想が寄せられた。

治療面や経済的に大きな困難を抱えるアジア・太平洋の陽性者たちの前向きな姿勢は被差別不安が強く孤立しがちな日本の HIV 陽性者を大いに触発した。特に開会式で HIV 陽性を公表したインドネシアのフリカ・チア・イスカンドールの果たした役割は大きかった。

6. HIV 陽性者の積極的参加

今回、アジア太平洋地域の HIV 陽性者たちが強く主張していたことの一つに GIPA (Greater Involvement of People Living With HIV/AIDS) の推進があった。

この理念は 1994 年エイズサミットで採択されたパリ宣言に謳われ、2001 年の国連特別総会 (UNGASS) のコミッ

トメント宣言においてもそれを一歩進める形でエイズ施策における HIV 陽性者の積極的関与を提唱している。パリ宣言においてはエイズ問題に顔を持たせるという消極的意味だったものがコミットメント宣言では、過去二十年余のエイズとの闘いにおいて蓄積した知識と経験をエイズ問題解決のための有効な人的資源としてとらえている。

世界中の HIV 陽性者が直面する問題は、経済、社会、文化、政治、宗教などその背景によって現れ方は異なるものの、基本的な点は共通している。それらは「治療アクセスの保証」「偏見差別の解消」「人権の擁護」であり、これらを解消するためにはエイズ問題のあらゆる局面において HIV 陽性者の視点に立つことが重要である。それ故 HIV 陽性者のより広範な関与が施策を成功に導くと考えられている。だからこそ、さまざまなエイズに関わるセクターがこれを理解し支援的なスタンスで HIV 陽性者の関与を推進しようとする。

つまり、GIPA は会議のテーマである“Bridging Science and Community”を実現する上でキーになるコンセプトであった。しかし、残念なことにこれが日本国内の関係者に広く認識されるには至らなかった。

7. 残された課題

7th ICAAP では「科学とコミュニティの英知の統合」を

目指した。海外からの参加者は当初予想されていたより多く、参加者の会議に対する評価もそれなりに高かった。アジア太平洋の地域会議としての役割を果たし、その点では成功したと言える。

しかし、国内においては科学に象徴される医療者や研究者の参加が低調で、行政関係者も積極的とは言えなかった。

国内では開催前から国内的な失敗は決定づけられていたとも言える。関係者の参加がなくてはそこにあるギャップを埋めようにも埋めることはできないのだから。逆に埋めるべき数々のギャップが浮き彫りにされてしまった格好だ。

それでも、7th ICAAP 以降の活動については会議中からいくつかの動きが見られた。国際 NGO とエイズ NGO は協働してグローバルファンド支援を進めるべくミーティングが開いた。HIV 陽性者の中にも、アジアの陽性者に触発

されもっと主体的にエイズ問題に取り組みたいという人たちが現れた。HIV 陽性者と厚生労働大臣との懇談も準備された。

そして、NPO 法人ふれいす東京代表池上千寿子さんが平成 18 年、東京で開催される日本エイズ学会において学会長を務めることが決まり、その準備委員会が招集された。彼女はコミュニティの活動家として初めて学会長となる。科学とコミュニティに橋を架けるには最高の人選であり、大いに期待したい。

こうして 7th ICAAP の延期決定以降、バンコクから神戸へと、さまざまなギャップに橋を架けるために進み続けてきた歩みを、ますます深刻化する日本のエイズと闘うためにさらに進めなければならない。今年 7 月、神戸で積み残した課題を解決するためにも、神戸から東京へ、そして明日へと私たちの闘いはこれからも続く。